

S2-2

岩手県における赤十字医療救護活動

盛岡赤十字病院

久保^{くぼ} 直彦^{なおひこ}、杉村 好彦、藤原 隆雄、佐々木宏文

東日本大震災における岩手県の赤十字医療救護活動について報告する。

[急性期] 震災発生後、盛岡赤十字病院では、災害時レベル の体制をとり、被災患者の受入、dERU の出動体制を布いた。発災当日に県災対の指示でSCUの設置を行い、救急患者受入を行った。翌日よりSCUで搬送患者の受け入れを行い、発災1週間で被災患者210人が入院した。またDMATと救護班の集合地と現地へ派遣基地の役割を担った。赤十字関連施設よりドクターヘリ2機、DMAT5チーム、最高時4地域で13救護班が活動した。赤十字被災地が広範囲であるため、沿岸の4市へ先発隊を派遣し、現地情報により追加派遣した。津波被災地は盛岡から100km以上の遠距離で、情報収集、通信手段がなく、環境の厳しい中、先発班が現地災対本部との調整し、各地で活動を開始した。

[慢性期] 本災害では被災傷病者は少なく、内陸部の病院で分散収容可能であった。しかし沿岸部は医療過疎地で、その医療関係機関が多く被災したため、医療機能は停止した。発災早期より災害由来の疾病と慢性期疾患の対応を行った。薬剤、物資、医療機器の供給等救護医療の充実に図るとともに、避難所から内陸部へ患者と薬剤処方を分散させ、また被災病院より急性、慢性期患者を受け入れた。支援体制の利便上、ブロック別に救護班の配置換えを行い、長期の活動に備えた。経過とともに地域の医療事情に隔たりがみられ、救護班の縮小、撤退を地域毎に進めた。各地域において赤十字は医療支援機関の中心として救護活動を行った。